

氏 名 (本 籍)	矢 吹 省 司 (東京都)
学 位 の 種 類	教 育 学 博 士
学 位 記 番 号	博 乙 第 41 号
学 位 授 与 年 月 日	昭 和 55 年 10 月 31 日
学 位 授 与 の 要 件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
審 査 研 究 科	心 理 学 研 究 科
学 位 論 文 題 目	心 理 的 防 衛 性 の 研 究 — 投 影 反 応 と 直 接 反 応 に よ る 検 討 —
主 査	筑波大学教授 教育学博士 加 藤 隆 勝
副 査	筑波大学教授 教育学博士 高 野 清 純
副 査	筑波大学教授 松 田 岩 男
副 査	筑波大学助教授 門 脇 厚 司
副 査	筑波大学助教授 医学博士 佐 々 木 雄 二

## 論 文 の 要 旨

### (1) 本論文の構成

本論文は全 9 章 455 ページにわたる主論文と主論文の表・図を補足する資料編 (別冊, 167 ページ) から成っている。

### (2) 研究の意義・目的

心理的防衛の概念はフロイトによって提唱されたものであるが、今日においては、人間の行動や個性の理解において欠かすことのできない基本概念の一つとなっている。しかるに、心理的防衛性についての研究は、その成立の過程からも推測されるように、専ら個性記述の方法に依存しており、知覚的防衛に関する一連の研究を除けば、実験的操作的検討に耐えうる研究はほとんどなされていない。

本研究は以上の点をふまえて、心理的防衛性の特質を実験的あるいは統計的接近法によって解明しようとするものである。特に、個人のパーソナリティを「意識される水準」と「投影的に表出される水準」の二面から把握し、両者のずれおよび対応関係を通して防衛性の構造を明らかにするとともに、あわせて発達の背景を検討することを目的としている。

### (3) 方 法

投影的に表出される水準のパーソナリティ特性の測定には、文章完成法、ブラッキー認知テスト、

ロールシャッハ・インクプロットによる方法等が用いられた。また、意識される水準のパーソナリティ特性の測定には直接法テスト(質問紙法)が用いられ、両水準のずれ及び対応関係が詳細に分析された。

なお、本研究は大きく四つに分けられ、それぞれの研究目的に合わせて、幼児、児童、青年、成人、神経症者が被験者として用いられた。

#### (4) 結 果

本研究によって得られた主な結果は次のようである。

① 一般にネガティブな動機や感情は、直接に表出されるよりは、間接的に投影的反応として表出されやすいこと、このような傾向は児童や成人よりは青年に、また正常者よりは神経症者に生じやすいこと、したがって、これは防衛性の一つの現われと解されることが明らかにされた。また、以上から投影的反応と直接的反応が個人のパーソナリティの異なる側面を反映していることは確かであり、これら二つの反応間の対応関係の解明によって防衛性の構造をとらえるという本研究の方法論が支持された。

② 投影的反応として表出されるパーソナリティ特性と直接的反応として表出される自己概念の対応関係には著しい性差が認められた。女性群の結果は、たとえば適応性において優れた自己概念を有するものほど「不安」を投影しやすく、また、直接的反応の内容が抑圧傾向によって特徴づけられるものほど投影的反応の内容は逆に過感傾向によって特徴づけられる、というように両反応の関係はほぼ一貫して逆相関的であった。これに対し、男性群に認められる両反応の関係では複雑で一貫性に乏しかったが、どちらかといえば正の相関を示す傾向がみられた。

③ 自己概念との間で最も顕著な相関関係(正負にかかわらず)にあるインクプロットへの反応は、男性群ではプロットIV(ロールシャッハ・テスト図版IV)であり、女性群ではプロットVI(ロールシャッハ・テスト図版VI)であった。しかもこの関係は男性群では正の相関であるのに対して、女性群ではすべて負の相関を示した。

この結果をさらに説明すれば、男性群の場合、自己を否定的に評価し、自己を強く危険なものともっているものは、プロットIVのような父性ないし男性性を特色とするといわれる投影材料に対して、価値的に低い特性、あるいは強く危険な特性を投影する傾向を示すといえる。これに対し、女性群の場合は、自己を活動的とみ、肯定的に評価しているものほど、プロットVIのように母性ないし女性性の否定的な面を特色とするといわれる投影材料に対して、活動性に乏しいなどのように否定的な特性を強く投影する傾向を示すことになる。

④ 幼児とその母親を対象として、「親の子どもに対する態度」と子どもの投影的反応の関係を検討した結果、「不安」を投影しやすい幼児は、母親から「攻撃性」を禁止されているものに多いことが見出された。また、「攻撃性」を投影しやすい幼児は、母親から「接触欲求」を拒否されているものに多いことが見出された。これらの結果で注目されるのは、母親によって禁止されがちな欲求の内容と投影された内容とが一致していないことである。つまり、「攻撃性の禁止」は「不安の投影」に対応し、「接触の拒否」は「攻撃性の投影」に対応している。

著者によれば、これらの結果は、母親の子どもに及ぼす影響過程が「子どもの認知的場における母親像」に大きく依存していることを示唆するものである。著者は、たとえば、禁止的・拒否的な母親は、子どもを母親のネガティブな感情にさらすことによって、いわば母親認知の汎化によって生ずるような、外界のネガティブな情緒的側面に対する感じやすさを強化すると解釈している。

## 審 査 の 要 旨

心理的防衛性の機能・特質についての考察は、これまでのところ、人間の深層心理に対する深い洞察力を備えた研究者の所論に負うところが多く、実証的・実験的にその法則性を究明しようとした研究はほとんどみられなかった。長く精神分析理論の研究を続けてきた著者はこの点に物足りなさを感じ、防衛性の機能・特質を実験的・統計的方法を通して解明することを試みたのが本研究である。

本研究では、防衛の結果として意識対無意識の持続的な内的葛藤が生ずることに注目し、防衛性は個人のパーソナリティの「意識される水準」と「投影的に表出される水準」のずれ及び対応関係に反映されることを実証するとともに、その様相を具体的に明らかにしている。この点で本研究は他の研究にみられない独自性をもつものであり、防衛性研究に新しい視点を導入したものとして高く評価できる。

また、「意識される水準」と「投影的に表出される水準」の関係は、特に女性群では逆相関の関係でさえあること、しかもこの傾向は「不安」や「攻撃性」のようなネガティブな情緒的特性に関して特に認められること、子どもの投影反応は母親の態度と関連があること、などを明らかにした点、精神分析理論の実証的検討として人格理論の発展に寄与するところが大きい。

ただ、このような評価にもかかわらず、なお検討すべき問題も残されている。たとえば、本研究では防衛性の指標を一貫して直接的反応と投影的反応のずれ及び対応関係に求めているが、この指標のみで防衛機制の類型の検証にまで進むことは困難であろう。したがって、理論的体系を整えるためには、さらに新しい視点の導入も必要となろう。また、本研究では多くの興味深い結果が示されたが、統計的には十分に満足すべき段階まで達していないものも含まれている。それらの結果を一般化するためにはさらに慎重な検討が必要である。

しかし、本研究は先駆的研究として大きな意義をもっており、今後、この面の研究に対して多大の示唆を与えるものと認められる。

よって、著者は教育学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。